

二 大幸キャンパス ― 医学部保健学科・大幸医療センター

◆ 臨時附属医学専門部と医学部附属医院分室

鶴舞キャンパスとともに、医療関係施設が集中しているのが、医学部保健学科・大幸医療センターのある大幸キャンパスです。両者の設置は比較的最近で、また小さなキャンパスでもあります。その歴史は古く、大幸医療センターは一九四三（昭和一八）年にまで遡ることができます。

前述したように、名帝大医学部は一九三九（昭和一四）年に、名古屋医科大学を母体に創設されました。しかし当時は戦時中であり、軍医の需要が急増しているにもかかわらず、軍医は不足していました。そのため、最小限必要な医学知識をもっている軍医の短期養成機関として「臨時附属医学専門部」が、医学部のある全国の主要大学に設置されました。名帝大での設置は、医学部創設直後の同年五月でした。施設は医学部の講義室を共用し、臨床実習は名古屋市内の病院に依頼して急場をしのいでいました。

専門部は高まる軍医需要に応ずるため急速に拡充が続き、一九四三（昭和一八）年までに次々

と専門部専用の新営建物・施設が木造ではありましたが建てられていき、また職員の増員など組織的にも整備されていきました。また同年には名古屋市中区在住の陸田しようさんから、同区新栄町（現中区新栄二丁目）にあった陸田ビルの寄附をうけ、専門部の診療病院として利用することとなりました。これをうけて、同年九月に医学部附属医院分室が、寄附された陸田ビルにおかれました【図9上】（次頁）。

翌年四月には専門部は「附属医学専門部」と改称し、七月には先の医学部附属医院分室が廃止され、かわりに医学部附属医院分院が同じ場所に設置されました。

◆専門部の廃止と分院の改組

しかし敗戦になると、専門部は一九四六（昭和二一）年度から生徒募集を見合わせ、最後の学生が卒業した一九五〇（昭和二五）年三月に自然廃校となりました。そのため残った医学部附属医院分院は、それまでの専門部の臨床実習病院の性格を改めざるをえなくなり、組織機構を改革、医学部の第二臨床附属病院として再スタートをきることになったのです。そして一九四九（昭和二四）年五月の新制大学への移行に伴い、医学部附属病院分院と改称されました。

その後分院は、名古屋市都市計画の区画整理のため、一九六一（昭和三六）年九月に東区東門前町（現東区東桜二丁目）に新病院を新築、陸田ビルから移転しました【図9下】（次頁）。



【図9】(上) 1926年頃の陸田ビル (下) 1962年頃の東門前町医学部附属病院分院
(名古屋大学附属図書館医学部分館所蔵)

◆医療技術短期大学の設置（大幸キャンパス）

昭和四〇年代になると、分院においても患者数が増加し、それに伴い外来や病室が手狭になり、また施設も老朽化したため分院の移転が、本格的に検討されるようになりました。そのような状況下にあつた一九七〇（昭和四五）年四月、愛知教育大学名古屋校の大学部が、刈谷市の新キャンパスに移転したため、その跡地に分院を移転しようという動きがおこりました。交渉の結果、一九七五（昭和五〇）年七月に正式に名古屋大学の所管となり、名古屋大学の第二のメイデイカルキャンパスⅡ現在の「大幸キャンパス」となりました。一九七七（昭和五二）年には医療技術短期大学部が設置され、旧愛教大の改修校舎を利用することになりました。医療技術短期大学部は、それまであつた医学部附属の看護学校（二八九四（明治二七）年設置）・助産婦学校（同年設置）・診療放射線技師学校（一九五五（昭和三〇）年設置）・臨床検査技師学校（一九六一（昭和三六）年設置）の四つの付設学校を統合したものでした。さらに一九七九（昭和五四）年七月には新病院が完成、分院がここへ移りました。

その後、一九九七（平成九）年に分院は大幸医療センターとなり、また翌年医療技術短期大学部も廃止され医学部保健学科となり、現在に至っています。